
ダイヤモンドの天使

夏野奈津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイヤモンドの天使

【Nコード】

N1005Z

【作者名】

夏野奈津

【あらすじ】

本作は、「ウィンドチャイムに連れられて」(Lunaria Projectにてフリーゲームとして発表)に収録されております表題作のスピノフ作品となっております。作品としてはある程度独立しておりますが、本編をご存知であることを前提として執筆しておりますので、予めご了承くださいませ。

第一章

幸せな時は、そう長くは続かなかった。

高校のころから野球部のエースとしてちやほやされ、甲子園では重圧を楽しむように軽々と優勝した。ドラフトでは重複指名され、プロ入り後は一年目から先発ローテーションを任された。二十代に入るころには若き左のエースとして君臨し、オールスターにも出場。また一つ瞬きをすれば、俺はもうチームのエースとなっていた。

だが、順調だったのはそれまでだった。人生は、そう簡単にはいかないものだ。

左腕を軽く動かし、適当な投球動作を試みる。だがそれは、肘に走る痛みと共にボロボロと崩れた。監督やコーチはゆっくり治せと言ってくれているが、もうかれこれ二年以上実戦から遠ざかっている。焦るなと言われても無理な話だった。

今日も今日とてトレーニングとも言えないような自主トレに励む。自然公園のランニングコースを淡々と走るだけ。そんな時間にさえ、年俸は支払われているのだ。集中している時はいいのだが、ふと我に返った時にはどうしても考えてしまう。……投げられないピッチャーに意味はあるのだろうか、と。

ランニングを終え集中を解くと、不意に誰かに見られている気がした。ファンが物陰からこちらを窺っているのだろうか、などという自意識過剰な思考は、見渡す必要もなくすぐに打ち消された。

一人の女性が、当然のように堂々とこちらを見つめていた。年齢は二十代前半といったところだろうか。見た目から、氣力に溢れる若さと大人びた感情が共存しているのがわかった。

彼女の不躰な視線に同じものを返していると、ふとその目つきに既視感を覚えた。つり目というのだろうか。彼女の鋭い目つきは、相手も思わず正直になってしまいそうなほどに鋭利だ。それは、自

主トレ中に何度も見かけた目つきだった。彼女はいつも、すれ違ひ様にその目つきで俺を観察してくる。だが、歩みを止めたのは初めてのことだった。

何か声をかけたほうがいいのだろうか。俺が悩んでいると、彼女のほうが先に動いた。いつも見かけていた力強い歩みで向かってくる。そして、俺の真正面で立ち止まって言った。

「ねえ、あんたさ、よく見かけるけどいつも何やってんの？」

凜とした声。身長差から彼女のほうが大きく見上げる形になるが、彼女はそれでもお構いなしだ。人によつては、彼女のその勢いだけで怖じ氣づいてしまふかもしれない。だが俺は、彼女よりも恐ろしいバツターと幾度も対戦してきている。むしろ、物怖じしない彼女に感心しているぐらいだった。

「これがたこ焼き売ってるように見えるか？」

「何それ。売ってるのは油なんじゃないの？ あんた毎日のようにいるわよね」

「なかなか言いづらいことをさらつと言うな。だが生憎と、俺はこれが仕事なんだ」

半分本当で、半分嘘だった。仕事のための自主トレではあるが、本来の仕事とは程遠い。

「へえ。怪我してんのに無理してトレーニングするのも仕事？」

「氣づいてたのか」

「見てればわかるわよ。走ってる時もそうでない時も、ずっと左腕庇ってるじゃない」

それなりには鋭い子のようだった。だが、左腕を庇うのは怪我がどうこう以前に大切だからに他ならない。左腕にもしものことがあれば、それこそ全てが終わってしまう。と、そこまで考えて、今まさにその状態になりつつあることを思い出した。

「んー……それが仕事ってことは、スポーツ選手か何かよね。だったら、正体とか訊かないほうがいい？」

「いや……」

ここまで訊いておいて何を、とも思ったが、そもそも相手が俺を知っている人間なら見つかった時点でバレている。彼女は、俺を知らないのだ。適当に答えるのも一つの手ではあったが、知られて困る職業でもない。俺は、正直に答えることにした。

「俺は野球選手だ。こんなんでもな」

「やきゅー？」

普段、その単語を口にすることは殆どないのだろう。幼い子供が親に聞き返すようなイントネーションだった。

「じゃああんた、もしかして有名な人なの？」

「さあな。それは世間に訊いてくれ」

最優秀防御率や最多勝などのタイトルだって獲得したことがある。それらは毎年刻まれていき、野球の歴史にだって残る偉大な記録だ。それでも、今の自分はそれらを誇る気にはなれなかった。天狗の鼻は、大切な左腕と共にへし折られてしまったのだ。

「じゃあ、世間に訊くから名前教えて」

本当に彼女は、何故こんなにも懐に入り込んでくるのだろう。

だが、不思議と嫌な気分ではなかった。そうさせない何かを、彼女は持っているような気がした。

「……白坂。白坂光司」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1005z/>

ダイヤモンドの天使

2011年12月3日22時10分発行